

## 保存問題

## キャンパス整備、女子寮の行く末は

## レーモンド設計の東京女子大学旧東寮解体

学生寮の解体といえば、2001年の東大駒場寮の解体が記憶に新しいが、築80年を越える女子寮がまたひとつ解体されようとしている。関東大震災直前、東京にRC造が本格的に普及する以前に建設された極めて貴重な建物である。

次世代のキャンパス計画を描き解体を決断した大学側。一方、若き日を過ごした思いが詰まる卒業生らは、建物を「活かす会」を組織する動きもあり、建築的価値を挙げる専門家もいて、寮を巡る思いは錯綜している。

武蔵野の台地に隣接する閑静な住宅街にある東京女子大学(東京都杉並区)。1918年、北米のプロテスタント諸教派による資金援助を受け、東京府豊多摩郡淀橋町字角筈(現・新宿)にて新渡戸稲造を初代学長に開設された。卒業生には、作家の永井路子氏、瀬戸内寂聴氏、デザイナーの森英恵氏、千葉県知事の堂本暁子氏らがあり、各界に著名人を輩出している。リベラルアーツを伝統とする名門女子大で、このほど寮解体が発表され、卒業生をはじめとする関係者の間で物議を醸している。

同大学は間もなく創立90周年を迎えるが、100周年となる2018年を1つの区切りととらえ、具体的なキャンパス整備計画を明らかにした。この計画は、各施設が老朽化し時代の機能的ニーズにそぐわなくなったと判断、再整備は中長期計画の緊急課題と

している。建て替えとなる施設は、旧東寮(5号館)、旧体育館(13号館)で、早ければ2007年夏に解体作業に着手する模様である。

学内では講堂・チャペルほか旧東寮、旧体育館を除く全7棟の建築が文化庁に登録有形文化財として登録されている。これらは、今後も解体されず、順次改修と耐震補強が施される。

同キャンパスは基本構想から、建築に関するまで、戦前から日本で活躍し、名高いアントニン・レーモンドの設計である。

1924年に校地を豊多摩郡井荻村(現・杉並区善福寺)に移転させるため、1922~38年にかけて、キャンパスが建設された。中でも旧東寮は1922年、キャンパス移転に先立ち、最初に建設されている。内部に洗濯室、炊事場、アイロン台、ボイラー室、煙突を取めるタワーを中心に、左右対称に居室の翼部を配し、

西寮、東寮と呼ばれ、各寮100人前後の学生がいた。1983年に60年を経て学生ニーズに合わなくなり閉寮、西寮は解体され、東寮は内部改装を行い、サークルの部室として利用されてきた。

藤岡洋保東京工業大学大学院理工学研究科教授は東寮の建築的価値を「レーモンドが日本で設計した最初期の現存作品であり、チェコ・キュービズムの流れを汲むという日本では極めて珍しいデザイン。そして建学の理想を具現化し特徴ある建物。当時のRC造の設計手法の典型的な側面とレーモンドのユニークな構造計画が合わさり、技術史的にも注目に値する」と評する。

キャンパス内にレーモンドの建築がこれほど完全な形で群をなし、保存活用されている例は類を見ない。旧東寮の88年に改築されなかったボイラー室などを見学したが、経年変化による傷みは激しい。しかし、80年前の設計とは思えない想像以上の躯体の頑強さにも圧倒された。

前出、藤岡氏は「建物が古いから保存しなければいけないのではなく、建築歴史的、技術的に極めて貴重なものであるから保存し、後世に伝えるべきである」と解体の見直しを訴えている。



シンボリックな鐘突



整然とならぶ旧宿舎の窓